

自然環境と生態

生物多様性

日時：平成19年10月13日（土） 10:00～12:00

講師：植田 邦彦（金沢大学理学部教授）

概況



【多様性の認識について】

リンネ、ダーウィンという生物学上、重要な発見をした二人から講義が始まりました。多様性を認識するには、多様なものを多様なものとして捉える必要があります。そのため、多様性を認識するには標本が重要で、英国王立キュー植物園を例に説明がありました。同植物園は、世界中から750万種の標本を集めた植物園で、希少な植物も植わっています。

多様性とはそれだけで、自然がまわっていくことができるシステムがあること、である。

【植え込みの問題について】

休憩後は、「植え込み」の問題について講義が進みました。その場所に自生していない植物の植え込みは、自然分布を攪乱してしまいます。また、地域固有の遺伝的変異を汚染してしまいます。同じ植物種でも、地域によって遺伝子レベルでの違いがあるのですが、その違いが変わってしまうことです。また、植物は動物と比べて雑種がしやすいため、元々そこに自生しない植物が持ち込まれると、簡単に雑種ができてしまいます。さらに、地域フロラにも影響を及ぼしてしまいます。植え込みにより新たな植物が入り込むことで、生育環境の競合を引き起こし（例えば、チョウが固有種の花より移入種の花を訪れるようになる、など）、場合によっては固有種の衰退を招くことも考えられます。

したがって、生物多様性を守るには、むやみな採取だけでなく植え込みもしてはい

けないのです。

植え込みの理由としては、自分の庭感覚で植えてしまうなどの「自分勝手な」植え込みだけでなく、「善意の」植え込みもあります。例えば、他の場所で絶滅しそうなる植物を持ち込んで守りたい、減少している種を増やしたい、という行為です。このような「善意の」植え込みは、「美談」として新聞に掲載されることもありますが、先生は「善意の」植え込みについても警鐘を鳴らしていました。

植え込みを防ぐためには、同一種内に遺伝的多様性があり、遺伝的変異の汚染は回復不可能であること、を知ったうえで、植え込みによる生態学的影響を知り、更に、植え込みを良しとする、誤った「環境教育」への発展を排除する必要があります。

講義後は、「植え込み」に関する質疑応答がなされました。